

## 主題 対話的な学びの充実を目指して

### ～「5ラインズ」による自己・相互評価の工夫を通して～

熊本市立 楠小学校 教諭 中里 宏

#### 要約

対話力を評価・分析するための指標として、対話のスキルを5つのラインに整理分類され束ねられた「5ラインズ」を活用し、子供の対話の実態を見取することを基盤とし、授業づくりや帯の時間での対話の取り立て型学習を行った。さらに、子供自身が「5ラインズ」を自己評価や相互評価に活用することで、自己の対話力を自覚し、より対話力を向上させようとする姿が生まれると同時に、授業の中でも獲得した対話力を生かして学びを充実させていく子供の姿が明らかになった。

キーワード

「対話力」

「5ラインズ」

「自己評価・相互評価」

#### 1 主題設定の理由

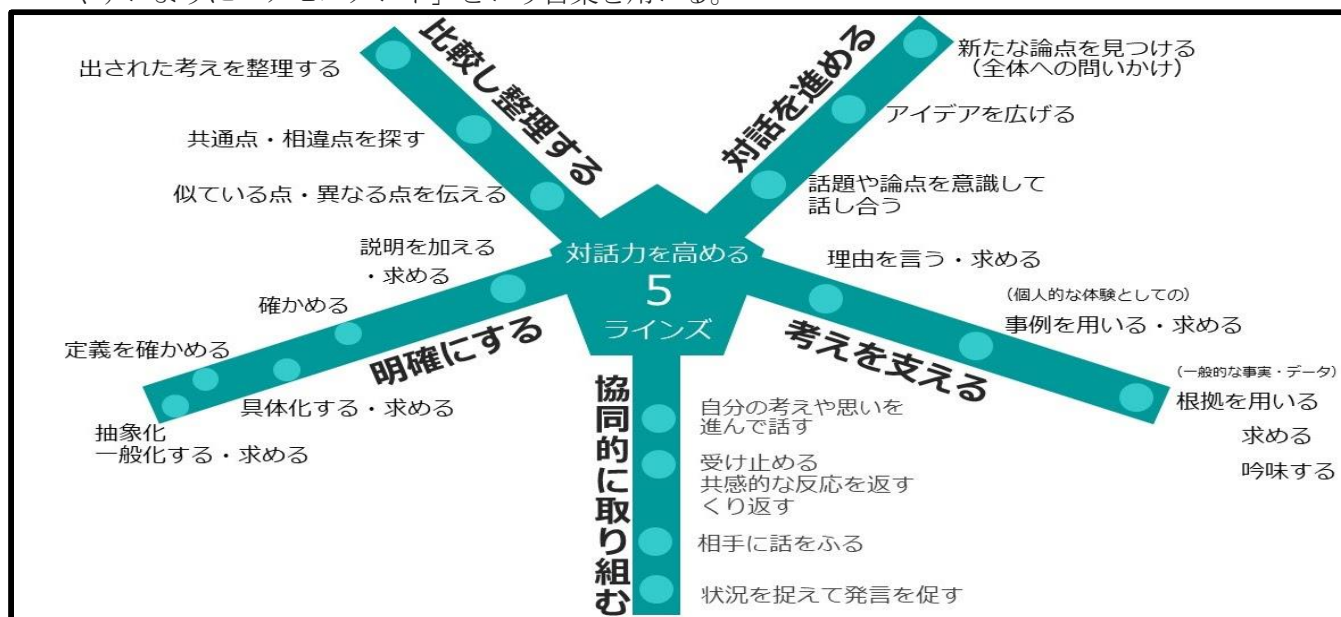
「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が文科省から打ち出され、対話の重要性については誰しもが認めるところであり、様々な実践が行われていることは周知の事実であろう。しかし、授業者である自分自身も対話の重要性は理解しつつも、対話的に学ぶ子供の姿に迫ることができず、対話的な学びの充実へ向け、どのような手立てを講じればよいのか困り感を持っていた。また、対話自体を教材化している国語科においても、対話場面は討論や学級会など限定的で、対話指導の時間が十分にあるとは言い難い状況にあり、経験や主観から対話指導を行ったり、苦手意識や困り感を持ったりする授業者は少なからずいるのではないかと推察する。

そこで、対話的な学びの充実に迫るためには、対話力をより客観的に評価・分析するための指標が重要だと考える。そして、その対話力を5つのラインに整理分類され束ねられたものが北川(2019)の提唱する「5ラインズ」である。その「5ラインズ」を活用し、教師が子供の対話を見取り、価値付け、学習活動との融合を工夫した実践を試みた。その結果、子供の対話力の向上に効果があったことは、令和4年度の4年生を研究対象とした研究論文でも述べている。しかし、子供が「5ラインズ」を指標としながら自己評価・相互評価することに関しては十分に扱われているとはいえなかった。これは、この実践が中学年を対象としていたという子供の実態も影響していた。そこで、令和5年度は、認知能力がある程度高まっていく発達段階の5年生を対象として、「5ラインズ」の活用が自己評価・相互評価を的確に行うための有効なツールとなり、より効果的な対話力の向上と、授業における対話的な学びの充実へつながることを目指した。

#### 2 5ラインズとは

子供たちの対話力を高めたいと願っているのだけれど、どこから手をつけてよいか分からない、子供たちの対話力の実態や課題を捉えるための指標がほしいという教育現場の声をもとに作成されたものが図1の対話力を高める「5ラインズ」である。この「5ラインズ」は、子供たちの対話の評価・分析するための実態把握に活用できるとともに、さらに対話力を高めるにはどんなスキルを身に付けさせていけばよいかを検討するための指標としての活用を視野に入れたものとなっている。「5ラインズ」に位置づけたそれぞれのスキル自体は、目新しいものではなく、むしろ、これまでに提示されてきたスキルの中から、日常的に様々な教科等の学習場面で取り込まれる対話で特に重要なものを抽出したものである。これらのスキルを、『協同的に取

り組む』『明確にする』『考えを支える』『比較し整理する』『対話を進める』といった対話の機能や大きな目的ごとに分類し、難易度をもとに中央から伸ばしていく形で配置したところに特長がある。また、本研究ではこの「5ラインズ」を活用して学級の実態を見取り評価する際に、学級の全体的な傾向を捉え、指導の方向性をつかむことを重視するため、個人への評価と区別しやすいように「アセスメント」という言葉を用いる。



### 3 研究の仮説

「5ラインズ」を活用した子供の実態把握、対話の取り立て型学習や授業づくりとの融合を基盤とし、対話スキルに着目した自己・相互評価を継続することで、子供は対話スキルに対してより自覚的になると同時に対話スキルは向上し、授業における対話的な学びが充実するであろう。

### 4 研究の視点

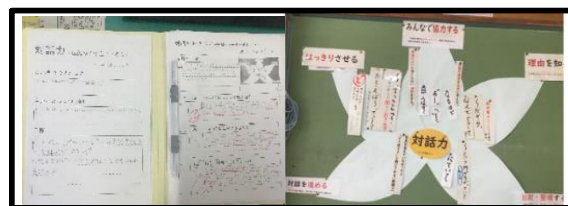
本仮説を検証するために、次の2つの視点を設定する。

- |     |  |
|-----|--|
| 視点① | 5ラインズを活用した子供の実態把握                      |
| 視点② | 5ラインズを活用した対話の取り立て型学習（アクティビティ）及び授業実践の工夫 |

そして、検証の際には対話力の自己評価・相互評価を記録した「対話ノート」を主に活用していく。

### 5 実践について

年間に取り組んだ対話学習の概要を表1に示す。短時間での取り立て型の学習と、教科書単元での融合型の指導とを関連させながら取り組んだ。また、年間を通して図2のように「対話ノート」と呼ぶ対話の振り返りや目標を記述していく取組を継続した。これらの活動は「5ラインズ」と照らし合わせて行った。なお、子供には「5ラインズ」の完成版を一時的に提示するのではなく、いくつかの「スキルライン」に限定して提示したり、子供が無自覚に活用したスキルを指導者が価値付けながら徐々に加えていったりして、図2のような学級のオリジナル版を構成させながら、表1のようなスケジュールで5年生を対象として北川准教授と共同研究を実施した。



【 図2 対話ノートとオリジナル5ラインズ 】

【 表 1 北川准教授との共同研究スケジュール 】

	対話の取り立て学習（朝学習・帯単元）	継続	教科書単元での活用（融合型の学習）
5月	<p>■診断的評価の実施</p> <p>□対話の信号機「拍手の是非」</p> <p>□対話の信号機を意識して話し合ってみよう「遠足のお菓子ベスト3」</p>	オリジナル版「5ラインズ」の掲示と「対話ノート」の継続的な活用	
6月	<p>□対話の信号機を意識して話し合ってみよう「梅雨の時期、お部屋時間ベスト3」</p> <p>□友達の対話から学ぼう～フィッシュボール～ ・協同的に取り組む・明確にする・考えを支えるポイントを意識して、代表対話者を評価</p>		<p>○『知りたいことを聞きだそう』～クラスをよりよくする会社活動～（話す・聞く） ・「明確にする」ラインの意識を促すモデル動画</p> <p>○『環境問題について報告しよう』『ベストパートナーと一緒に環境コンクールを開こう』（書く） ・「明確にする」相手の伝えたいことと資料は結びつき</p>
7月	<p>□協同的に取り組む・明確にする・考えを支える、を意識して友達と話し合ってみよう。「夏休み、暇なとき何をやる？」</p>		<p>○『世界一やかましい音』～山場で起こる変化に着目して作品の心をつかんで交流しよう～（読む） ・「考えを支える」の「教科書の根拠」に吟味することに着目し、モデル動画（代表児童）を作成、子供の様子を動画に撮影・視聴で価値づけ。</p> <p>・「対話したくなる発問」と子供の問いによるグルーピングによる「対話の活性化→子供の問いから発問を考え、「ガヤガヤのまちは、『しずしず』のまちではだめ？」</p>
9月	<p>□反応禁止ゲーム ・「協同的に取り組む」の、受容的な雰囲気強化</p> <p>□図形のテレフォン ・「明確にする」の強化</p> <p>□図形のテレフォン、ネクストチャレンジ。 ・「明確にする」の強化（前回の失敗を踏まえて…）</p> <p>□比べて区別ゲーム ・「明確にする」の強化</p>		<p>○『問題を解決するために話し合おう』（話す・聞く） ・自分たちのクラスの問題について、考え解決するために、「明確にする（はっきりさせる）」を意識して対話する。</p> <p>・何について話し合うのか、目的や条件を意識して対話。</p> <p>○『注文の多い料理店』～再読者をうならせよう大作戦～（読む） ・「考えを支える」「明確にする」を意識して、言葉（根拠）を明確に、どのように想像したか友達との差異をはっきりさせ対話する。</p>
10月	<p>□比べて区別ゲーム ・「和菓子をさぐる」と「和菓子を知る」の違いは？</p>		<p>○『和の文化を受け継ぐ』（読む） ・「味わい楽しむ」って何か考える。 ・「はっきりさせる」を意識して対話する</p>
11月			<p>○『伝えたい、心に残る言葉』（話す・聞く） ・「明確にする」を意識し、伝えたい言葉が、相手に伝わっているか「たしかめる」ことを意識しアドバイスし合う。</p>
12月	<p>□ショートストーリーについて語ろう ・写真やイラストから考えたミニストーリーについて、どんな話が聞きだすというミニゲーム。相手の思い描いたイメージや話を「明確にする」を意識。</p>		<p>○『大造じいさんとがん』（読む） ・「考えを支える」「明確にする」を意識して、叙述の情景描写の意味について対話。 ・「5ラインズ」のどこを意識して対話したか自己評価した振り返りを実施。</p>
1月	<p>□理想の6年生に向け、どのような対話ができる自分になりたいか目標設定。その目標を週1回のフリーペアトーク時に観察者に宣言し、アドバイスをもらう。 ・「制服・私服」「給食・弁当」「長期夏休み・夏と秋分割休み」「食品ロスは自分に関係ある？」</p>		<p>○『資料を見て考えたことについて話そう』（話す・聞く） ・「考えを支える」「明確にする」を意識して、資料から何が読み取れるのか、資料のどこに着目して、何を言いたいかを考え合う対話。</p>
2月	<p>□1月の対話ノートを見て、新たな自分の目標を設定。目標をもとに、フリーペアトーク時に目標宣言&amp;アドバイス継続。 ・「食品ロスは減らせるのか？」「理想の生き方について」「お金があれば幸せなの？」</p>		<p>○『手塚治虫』～伝記を読んで生き方について交流しよう～（読む） ・「明確にする」を意識して、相手がなぜ、どのように考えているのかを確かめるようにして対話。</p>
3月	<p>□2月の対話ノートを見て、新たな自分の目標を設定。目標をもとに、目標宣言&amp;アドバイス継続。ペアからグループへ対話人数を拡張。 ■総括的評価の実施</p>		<p>○『弱いロボットだからできること』～多角的新聞で教室を埋め尽くそう～（読む・書く） ・これまでに培った対話力を生かして、新聞記事について、意見交換する。「豚の心臓移植」「義足でオリンピック」「ジェンダーレストイレ」</p>

(1) 視点1 5ラインズを活用した子供の実態把握

まず、5月に本学級の対話力に関わる診断的評価活動に取り組んだ。

話題：漫画・アニメ・小説の良さとは？（後半：新聞・テレビ・インターネットの良さとは？）

クラス34人を8グループに分け、4グループが話し合う様子を別の4グループがタブレットで動画

を撮影。その後、後半組が話し合い、前半組が動画撮影を行った。その動画より図3のように子供の発言を文字に起こし、5ラインに即して分類した。そのデータを活用し、北川准教授と共同でアセスメントを実施した。そして、1学期を終えての考察から今後の方向性を検討した跡が図3である。

	協同的取り組み	明確にする	考えを支える	比較し整理する	対話を進める
1 A	私が持っていく物は懐中電灯と寝袋とマッチ棒です。				アイデアを出して出す
2 B	なぜですか。なぜ懐中電灯を持っていくんですか。		理由を求める		
3 A	えっと夜になった時とかが、周りが暗くなった時とかになんていうんだろ？周りを明るくできたりする、できるからです		理由を言う		
4 B	ほう、なるほど。なぜ寝袋を持っていくんですか。		理由を求める		
5 A	え？山小屋、寒そうだし、寝る所を確保しないと寝る場所が無くなさそうだからです。		理由を言う		
6 B	//なるほど。		共感的な反応		
7 C	//そもそも山小屋		共感的な反応		
8 B	なぜマッチ棒を持っていくんですか。 えっと、ライターでもいいけど、ライターはなんているんだろ？つかなくなる？かもしれないけど、マッチ棒はたくさん持		理由を求める		

子供の発言を5ラインズに照らし合わせる

明確化した課題点

奨励点

5ラインズを活用した実態把握今後の目標や手立ての検討

【 図3 診断的評価結果と北川准教授・中里の共同アセスメント時に活用したホワイトボード 】

データや日々の授業の実態から、相手の考えを明確にし、相手のさらなる発言や、理由を引き出そうとする意識や姿勢が低いことが今後の課題ではないかという実態が明らかになった。また、どのような対話がより良い対話であるのか自覚できていないこともその前提にあるのではないかと推察した。これらの課題を解決するために、対話の取り立て学習であるアクティビティのアイデア、自己・相互評価の方法等の計画を立てていった。このように、「5ラインズ」を活用することで、子供の対話の実態が明確になり、対話指導における目標が設定され、それに応じた手立ても検討及び計画されていった。また、表1に記載しているが、3月に総括的評価活動として、この診断的活動時と話し合いのテーマは変え、同様の対話形式での実態把握と分析方法で子供の変容に関する検証に活用している。

(2) 視点2 5ラインズを活用した対話の取り立て型学習（アクティビティ）及び授業実践の工夫

① オリジナル版5ラインズを活用した対話力へ意識を高める工夫

共同アセスメントにより、目標が明確になったことで、「明確にする」ラインの「～ってこと」を用いて対話していたり、「どういうこと？」と相手の理由を引き出そうとしたりする姿勢や発言があったりしたら、学級全体に奨励し、価値付けていった。その際には、前述したように随時図4のように掲示していった。また、この掲示に沿った発言をしている対話を録画し、クラス全体で視聴して、その価値について対話して意識付けることも継続した。さらに、ワークシートにも「5ラインズ」のどの力を発揮することで他者

どのラインの力を発揮したか印をつけ、自分なりの考えに至ったか自覚する工夫。

【図4 教室の掲示及び授業のワークシート】

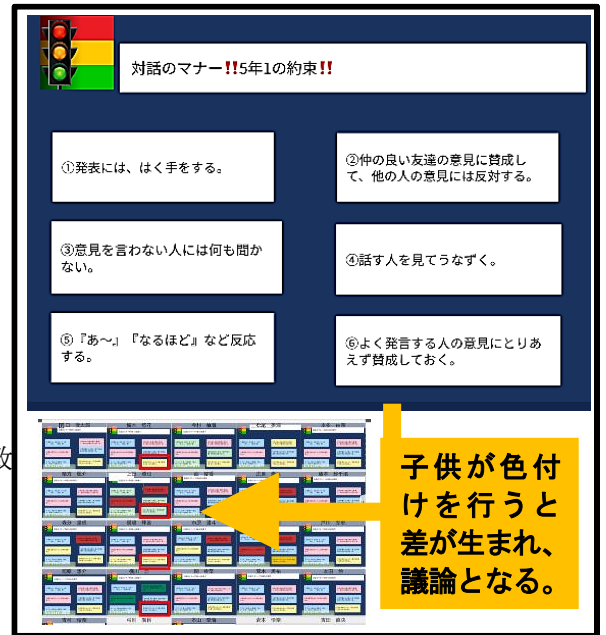
の考えを引き出したり,自分の考えが深まったりしたか自覚できるようにする工夫を図4のように行った。このように,対話力の指標である「5ラインズ」を適宜活用し,意識付けを継続した。

## ② 5ラインズを活用した対話の取り立て型学習(アクティビティ)及び授業実践の工夫

「5ラインズ」を活用して子供の実態を評価・診断していく中で,特定のラインを意識付けたいという際には,適宜対話の取り立て型学習(アクティビティ)及び授業実践との融合を図った。また,対話の取り立て型学習の際には自己・相互評価の視点を取り入れていくことを踏まえている。

### ア クラスのグラウンドルールを作る「対話の信号機」

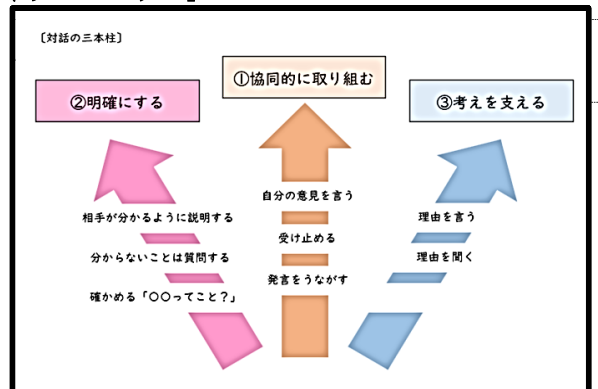
1学期の序盤,対話のマナー,クラス独自のルールともいうべき意識付けを行うために,対話の信号機というアクティビティを実施した。「5ラインズ」で分析したクラスの実態に応じたスキルラインで推奨したいものや,他者の発言後は必ず拍手をする等,子供は良かれと思ってやっているが,指導的には対話を阻害すると判断するもの,すこし迷いそうな選択肢等を織り交ぜて選択肢を入れるのがポイントとなる。対話における行為として,青は良い,赤は良くない,黄色は迷うもの,時と場合によるものといったように色付けを行う。全員一致で「青」や「赤」のものは,そのままクラスのルールとして採用していく。そして,「黄」や「青か黄色か」といったように差が生まれたものについて,議論をする。この議論によって,クラス独自の対話におけるグラウンドルールが生まれていく。このグラウンドルールは一方向的に教師が示すものではなく,子供が自ら議論するからこそ,学級文化として根付いていったのではないかと考える。



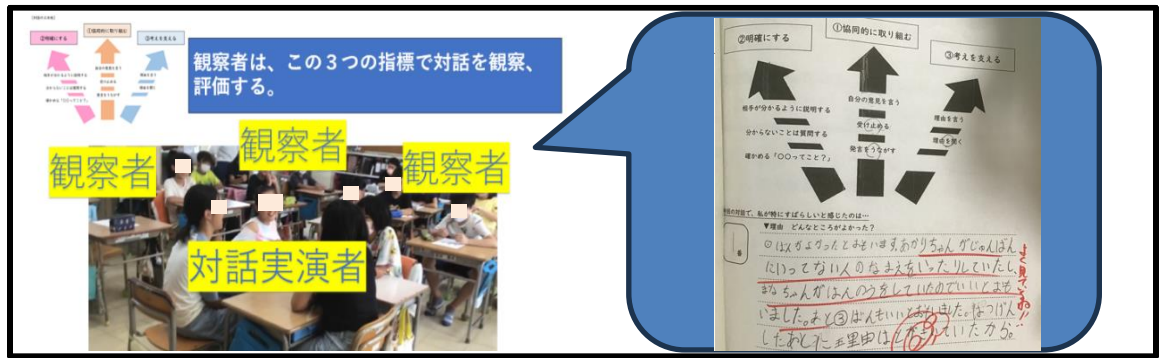
【 図5 対話の信号機 】

### イ 客観的評価から対話力の視点を自覚化する「フィッシュボウル」

上記「対話の信号機」や普段の授業場面での価値付け等を積み重ねた上で,1学期末に図6のように「5ラインズ」のうち基本ラインとなる3つを子供に示し,それぞれのラインの具体的な例も挙げた上で,フィッシュボウルというアクティビティを行った。図7のように,教室中央で代表者が対話を実演する。観察者は,その対話の様子を3つのラインの視点で評価活動を行う。図7のようなワークシートを活用し,3つのラインのどのラインが特に優れていたのか思考し,評価を行った。一見,実演者が評価されるだけの活動のようだが,観察者は評価するという活動を通して,どういった姿や姿勢,発言がより良い対話なのか自覚することにつながり,自分の目指す姿を自覚化する活動となっている。詳細は後述するが,実際に,この活動の後には,他者を評価した視点を自分の目標に活用する子供の姿が対話ノートの記述からも明確に生まれていることが認められており,この活動の効果は高かったのではないかと考える。



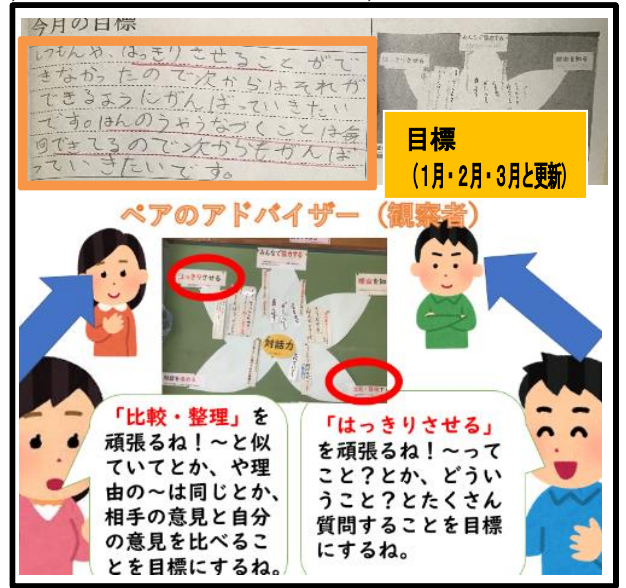
【 図6 基本の3つのラインの提示 】



【 図7 フィッシュボウルの様子と評価シート 】

ウ 目標設定および自己・相互評価「フリートーク」

3学期は図8のように、対話ノートの記事を読み返し、理想の6年生になるためには、どのような対話を目指すのか目標を設定した。そして、フリートークの際には、その目標をペア（観察者）に宣言し、対話をした後にアドバイスをもらうという活動を週1回継続した。フリートークの時間はアドバイスを含めて7分程度、話題はその時進行中の授業内容と関連のあった「生き方」等であったり、時事的ニュースであったりと多岐にわたった。3学期の最初は、「5ラインズ」を基に振り返ったり、次の自分の目標を設定したりする子供たちであったが、次第に、アドバイスしてもらったことを基に、自分なりに5ラインズを具体的な目標へ落とし込んでいく姿が生まれた。さらに、他者の対話の姿から自分の対話へ生かせる部分はないか探す子供の姿も見られるようになるなど対話力を自覚し向上させようとする姿勢を育む上で、有効な活動となった。



【 図8 目標設定・フリートーク 】

エ 5ラインズを活用した授業構想

図9は「世界でいちばんやかましい音」を教材とした授業構想を進める中で使用した略案である。「5ラインズ」の特にどのラインを子供が意識すると、より単元のねらいに迫った学びになるのかと構想していった。「明確にする」「考えを支える」のラインが本単元との親和性が高いと判断し、それらのラインを意識することを加味した授業計画、単元構想となっていた。また、意図するラインの発言をする子供の様子を録画し、その動画を授業の冒頭で視聴し、その価値について対話したり、実際の授業場面でそのような対話をしている子供は随時価値付けたりしていった。その上で、本時の想定される主発問を事前に吟味し、これまで身に付けてきた「明確にする」「考えを支

単元の目標		「物語の構成を捉えて物語の全体像を具体的に想像し、読み取ったことに基づいて自分の考えをまとめ、協動的な対話を生むための工夫」		単元や本時のねらい 子供の問いへの解決方法 主発問と5ラインズの親和性
5ラインズでいう、「明確にする」「考えを支える」ラインへの意識を高めたうえで、効果的な「単元を通した課題」や「問」があれば、より子どもは対話的な学習活動を展開するであろう。				
21本時の授業計画				
(1) 本時の目標		物語の構成を踏まえ、全体を通しての大きな変化について考えることができる。		
過程	時間	学習活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>○主な発問・指示</li> <li>○予想される子どもの反応</li> <li>○教師の支援</li> <li>○評価</li> </ul>	
導入	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○11単元の課題と本時のめあてをつかむ。</li> <li>○「世界でいちばんやかましい音」でつけたい方について確認する。</li> <li>○昨日の振り返りや話し合いの様子を…</li> <li>○今日のグループの問いは…</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○これまでの学習の軌跡を振り返るよう教室掲示やスライドを活用する。</li> <li>○本日の問いとその問いへ対する解決の方法への意識付けを図る。</li> </ul>	
	「変化の根拠や理由について対話して考えを深めよう」 本日の問い「王子様以外の、町全体や王様までなぜ…?」			
展開	25分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○この2つのグループの意見に、外の根拠や理由はないかな?</li> <li>○王子様へのもういっぺんから…</li> <li>○自然の音が入って…</li> <li>○町の人にも生まれて初めて…</li> <li>○町の人たちの行動が…</li> <li>○私が町の人なら…</li> <li>○みんなの意見に納得したか?</li> <li>○納得した、だって…</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○物語全体を通して考えられるようにする。</li> <li>○子どもの発言は、どこが根拠なのか、山場を中心とした展開のどの叙述か、自分なりの理由づけは何かを明確にしながら発言を取り上げていく。</li> </ul>	
	個人→ペア→班→全体で共有していく。		<ul style="list-style-type: none"> <li>○対話の促進をねらった主発問</li> <li>なぜ、「ガヤガヤ」の都という前まはましたの?</li> <li>①→ガヤガヤのままがいい</li> <li>②→シズシズの都に変えたほうが良かった</li> <li>③→その他</li> <li>理由は?根拠は?</li> </ul>	

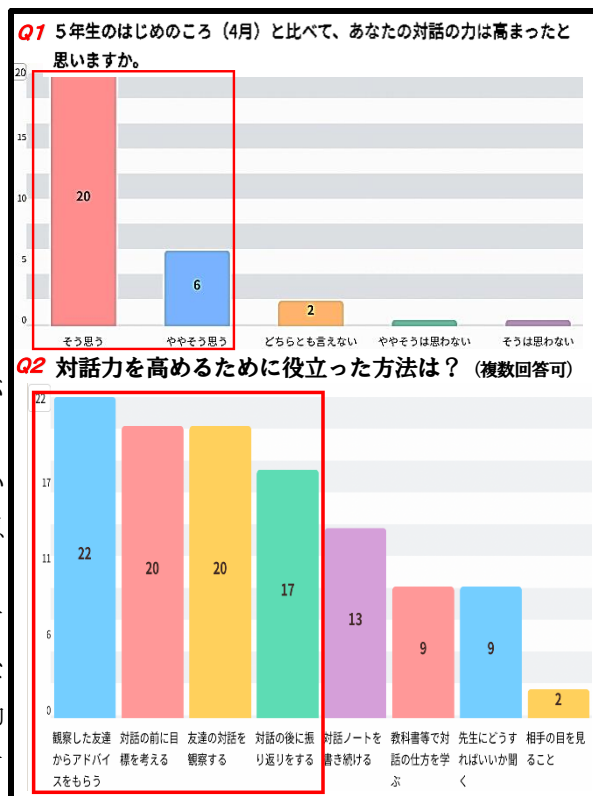
【 図9 授業構想における略案の一部 】

える」ラインへの意識と対話を活性化する発問が融合するように本時の流れを構想した跡が図9である。表1で示したように、この単元だけでなく、年間を通じて単元構想の段階で意図的に「5ラインズ」と授業の融合を図ることで、教材や単元の特徴を活かし、対話力向上と学びの充実を目指した。

## 6 子供の変容

### (1) 対話ノートと意識調査から見る子供の变容

対話ノートの記述及び総括的評価時における意識調査の結果から子供の变容を分析する。まず、意識調査について見ていきたい。図10は診断的評価時の意識調査の抜粋である。Q1ではクラスの有効回答数のほぼ全ての子供が対話力は高まったと自覚している。「どちらとも言えない」と回答した子供の対話ノートを分析すると、学期末になるほど評価の視点が明確化していく分、自己評価が低い記述が目立っていたことも影響しているといえるだろう。また、Q2は、その対話力向上に役立った方法についての意識調査である。多くの子供が有効だったと思う方法は、他者からのアドバイス、自己分析による目標設定、他者の対話の様子の観察、対話自体について振り返ること、と挙げている。この結果より明らかなのは、「5ラインズ」を活用した自己・相互評価活動に子供自身が価値を見出しているということだ。そして、自己・相互評価の継続が確実に子供の対話力の自覚において有効な支援となったということであろう。



【図10 意識調査の結果（抜粋）】

次に、対話ノートの記述内容を、量と質の両面から分析し、どのように対話力を自覚し高めようとしていったのか、その変容を明らかにしたい。まず、量的な記述内容の変化について、診断・総括的評価時の振り返り記述を対象として図11のように、抽出語句を頻出順に列挙すると同時に、抽出語句を対象として図12のようにテキストマイニングも行った。「反応」「質問」については、どちらも同程度出されており、順位も高い。これらが重要であることは、令和4年度の実践時に在籍した子供が3割程度いたことも影響したと推察される。しかし、5月の診断的評価段階での「反応」は、「いいと思う」と返答することや拍手することを想定している子供が大半であり、これまで記述したアクティビティや授業実践などで価値付けてきた「〇〇ってこと？」等の相手の伝えたいことを確認するような反応とは異なっていた。同様に、「質問」についても具体のレベルでは違いがあったと推察される。次に、両評価活動の記述でそれぞれ特徴的な点として、診断的評価では、「目」（12位）、「見る」（16位）、「拍手」（18位）といったノンバーバルな記述が散見されている。これらは、共起分析の結果（図12）を見ると、Aの箇所から「目を見て話す」「話を聞いたから拍手する」のように共起していることが確かめられ、対話の形式

順位	診断		総括	
	抽出語	回数	抽出語	回数
1	思う	30	話	37
2	反応	21	思う	33
3	意見	16	意見	22
4	質問	12	言う	19
5	話	11	反応	18
6	人	10	自分	16
7	もう少し	7	質問	13
8	言う	7	話す	13
9	相手	7	もう少し	12
10	聞く	7	対話	12
11	変える	7	変える	10
12	目	7	相手	9
13	話す	7	違う	8
14	言える	6	聞く	8
15	少し	5	話し合い	8
16	見る	4	次	7
17	自分	4	目標	7
18	拍手	4	頑張る	6
19	話し合い	4	広げる	6
20	グループ	3	少し	6

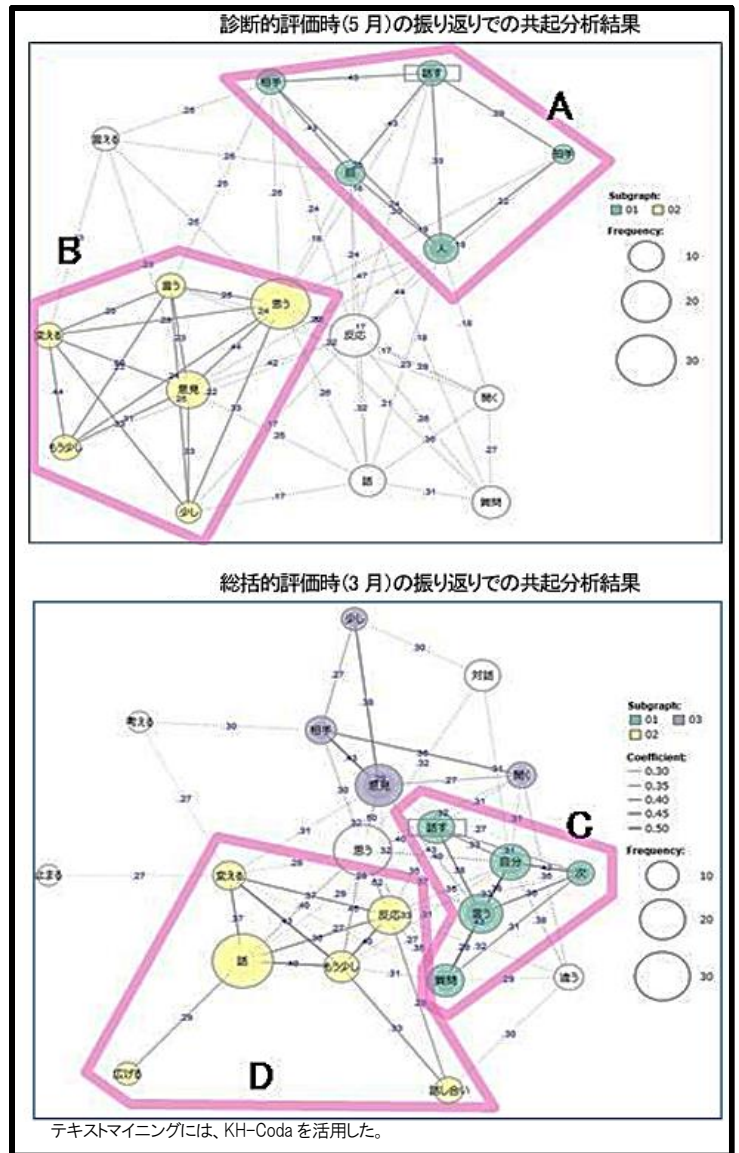
【図11 振り返りの抽出語句】

的な態度への意識に留まっていた状況がうかがえる。また、図11のB 診断的評価段階では、対話を広げ深めていくことに関してはほとんど意識が向けられていなかったと判断される。一方、総括的評価では、「次」(16位)、「目標」(17位)、「頑張る」(18位)といった積極的に対話学習に取り組む姿勢に関する語句が頻出してくる。また、「自分」(6位)が増加しており、対話スキルの獲得・改善を自分自身の課題として自覚している様子うかがえる。共起分析の結果(図12)でも、Cの箇所「自分」から「質問」を「言う」というように共起しており、「5ラインズ」の対話スキルを意識し、自己・相互評価している様子が分かる。また、図12のDでは、「話を広げる」「話が止ったら話題を変える」へ意識を向けた記述が出ているが、これは「5ラインズ」の「対話を進める」のラインに関するもので、他に比べて対話を俯瞰して捉える必要があり、高度な働きかけである。以上のことから、学級全体の傾向として、「5ラインズ」に沿った振り返りの記述や自分の改善点を意欲的に記述するものが増加したといえる。

次に、2人の抽出児(全て仮名)を取り上げ、自己評価の記述の質的な変容を見ていく。ここで抽出したヨシノは4月の時点では対話力向上への取組において特定の友達としか話さないという姿勢で、対話に対して消極的な様子が見られていた。一方、アキエは4年生の時から担任し、年度当初から対話に意欲的であり、さらに1年間の対話に関する学習を積み上げてきた子供である。

【ヨシノ：対話に消極的であった子供】

図13のように、ヨシノは、5月の時点では「つぎはもっといいところをかけるようになりたい」とだけ記述しており、自身や自分たちの対話について適切にメタ認知することが難しい状態であった。しかし、7月には下線部①②のように「協同的に取り組む」や下線部③のように「理由を支える」という「5ラインズ」に沿った発言に着目し、他者を評価することが出来ている。この相互評価活動が、ヨシノに



【図12 診断・総括的評価のテキストマイニング】

ヨシノの振り返り記述の変容	
5月	つぎはもっといいところをかけるようになりたい。
7月	1番が良かったと思います。Xさんが順番に言っていない人の名前を言ったりしていた <sup>①</sup> し、Yさんが反応していた <sup>②</sup> のでいいと思いました。あと、3番もいいと思いました。発言した後に、理由はとか聞いていた <sup>③</sup> から。
2月中旬	反応や頷いたりするのはできたので、これから頑張っていきたいです。また、はっきりさせるところ <sup>④</sup> や質問があまりできなかったので、次からもはっきりさせるや質問をできるように頑張りたいです <sup>⑤</sup> 。
2月末	はっきりさせることはできなかったけれど <sup>⑥</sup> 、「〇〇さんに似てて」とか反応はできてよかった <sup>⑦</sup> です。次もはっきりさせることができるように頑張りたいです。
3月	ペアとは違って時間も長いのでたくさん質問や反応がしっかりできていたのでよかったです。いつもよりたくさん質問できた <sup>⑧</sup> けど、はっきりさせることはできなかったの、次はできるように頑張りたいです。

【図13 ヨシノの対話ノートの抜粋】



とって対話スキルを具体的に理解し意欲を高める契機となったようであり、7月を境に記述の質と量に変化が見られていった。そして、2月には、下線部④では「明確にする」や下線部⑦では「比較・整理する」という視点にまで触れて、他者だけではなく、自己評価をすることが出来るようになっていく。さらに、下線部⑤⑥からは、自己評価をもとに、目標をたて、次回の対話へ生かそうという記述まで見られるようになっていく。そして、3月にはこれまで課題として挙げることの多かった質問することが出来るようになったと自己評価できるまでに至っている。このように、「5ラインズ」を活用して自己評価する中で、自己の対話する姿を捉え、目標設定に生かしたり、自己をより適切に評価したりするに至った。ヨシノにとっては、指標としての「5ラインズ」に合わせて、友達のふるまいを相互評価する経験の積み重ねが、自身の対話スキルへの理解と活用に大きく影響したといえるだろう。

【アキエ：対話スキルへの自覚が高い子供】

図14のように、アキエは、対話への意欲が高く、対話力を見取る視点についても4年生時に1年間を通じて学んでいた。そのため、下線部⑨⑩のように、5月当初の時点で既に「5ラインズ」の視点を活用している記述が見られている。7月には、他者を評価するという活動を通して、下線部⑪⑫のように、「5ラインズ」の視点をより具体的な言葉に落とし込んでいく記述が増えていく。さらに、2月になると、相互評価活動を通して、他者からのアドバイスを得ることで、下線部⑬⑭⑮⑯のように、より客観的に自分の対話力を自覚し、改善するにはどうすればよいか思考する記述が見られる。さらに、下線部⑰のように、他ラインよりも高度である「対話を進める」ラインも意識し自分の対話力を高めようとしていることが窺える。このことから、5月当初から対話への意欲や意識の高かったアキエは、「5ラインズ」を用いた自己評価や相互評価の活動を継続することを通して、他者からの客観的評価を自己の対話力向上に生かすという「学び方」自体を獲得していったのではないかと推察される。

これら2人の振り返りの記述の変容から、実態が異なるヨシノとアキエであったが、どちらも「5ラインズ」を活用した対話指導と自己・相互評価活動を通じて、自己の対話力を自覚し、向上させようとしていったことが明らかになった。また、このような個々の実態に応じた対話力の自覚の高まりは、他の子供においても同様に見られていた。

アキエの振り返り記述の変容	
5月	自分が思った意見に友達の見解も少し加えてみるという思いがありました。あと、自分の意見や思ったことばかりを伝えるのではなく、友達の意見にも耳をかたむけてみると、新しい発見や気づきが見つかるんじゃないかと思いました。前からそういうことは考えていたけど、今回の話し合いでより考えが深まりました。みんな1人1人自分らしく意見を伝えることができたのでそこが今回の話し合いで一番よかったところかなと思いました。もう少し変えられそうなところは、もう少しみんな確かめたり反応をしたらもっといい話し合いをすることができるんじゃないかかなと思いました。
7月	みんな「私は〇〇をします。理由は…」と当たり前のように分かりやすい、納得のできる理由を話していたところが良かったと思います。他には、2番もよくできていたと思います。理由はその意見につなげて「だれとやるの？」や「どのくらいやるの？」としっかり質問できていたことで2もできていると思いました。
2月中旬	今日はZ君がアドバイスをしてくれたのですが、やっぱり話がそれていると言われてしまいました。でも、今まで通り話題を広げることができていたので、次回対話する時も、話す内容のまま、今以上に話題を広げて楽しくできるように頑張りたいです。
2月末	前の対話でできていなかった、話がそれないということ意識して対話して、「生き方」について沢山の知識をもって生きると普通の生活でも勉強でも困ることなく良い、憧れの生き方だと考えました。今回の目標は達成できたので、ちょっとできなかった理由を、次の対話で言えるようになりたいです。
3月	今までの対話で一番目標通りに話せたと自分で感じました。10分も話す時間があつたのに、時間が足りないと思えました。私の目標は話を広げることだったので、アドバイスしてくれたαくんが「少し会話が止まった時に新しい質問や話をして」と言ってくれました。しかも「パッと考えたらもっとこうしたりいいということがない」とも言ってくれました。ですが、「学校で」という土台を分かっていたので、これから話す内容を今より理解しようと思いました。

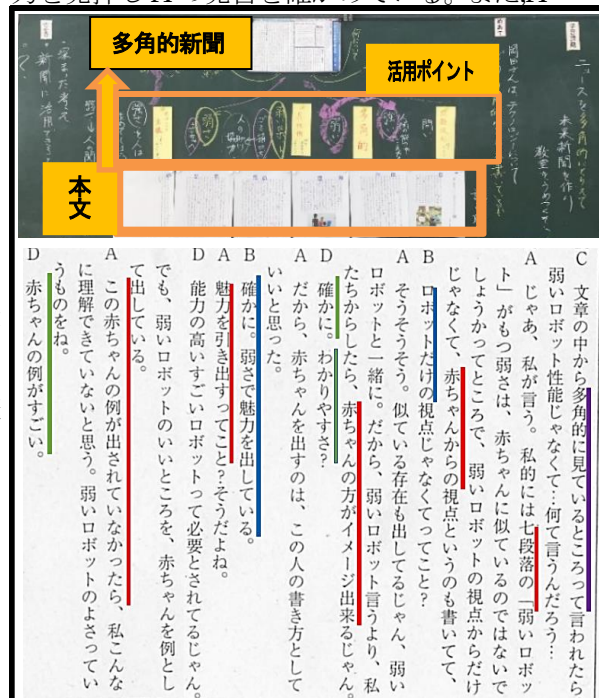
【図14 アキエの対話ノートの抜粋】

(2) 授業の中での対話の変容

「5ラインズ」の活用で高めた対話力が実際の授業でどのように発揮されるのか、学年最後の単元「弱いロボットだからできること～多角的新聞で教室を埋め尽くそう～」の授業の対話

場面から検証したい。熊本市教育センター中尾指導主事と協働して実践した単元でもある。その図15は第3時間目の板書と4人のグループの対話場面を文字に書き起こした一部である。

言語活動として、多角的新聞と題し、自分が興味を持った時事的新聞記事について多角的に捉えて新聞を書き、教室を埋め尽くすという活動を設定した。第3時は多角的新聞を書くために、本文のどのような書きぶりを参考にすると良いのか検討した。Cの発言を皮切りに、Aが段落の内容について語り、Bが「5ラインズ」の「明確にする」力を発揮しAの発言を確かめている。また、Aが自分の意見にさらに理由付けを行っているが、これは国語の時間に意識して取り組んできた「考えを支える」ラインの力を発揮していると推察される。また、そのAの発言に対してDが「確かに」と反応しているが、これも授業中に常に意識付けを行ってきた「共同的に取り組む」ラインの相手への共感を示す反応である。同様にBも同意した上で、Bが「魅力的」と新たに価値付け、Aはその価値付けに対し、「明確にする」ラインの「～ってこと」という継続的に価値付けてきた言葉を活用している。そして、Dが赤ちゃんという例の良さを再確認し、AとDが同意していくという対話が繰り返される。最終的には多角的新聞を書くにあたり、本文から効果的な例を挙げる重要性を学び取っていく。この対話はある班の対話の一部だが、他の班でも同様に、これまで培った対話力を発揮する姿が見られた。



【 図15 第3時の板書と班の対話の一部 】

## 7 考察及び今後の展望

今回の実践では、「5ラインズ」を活用した教師による実態把握と対話活動の工夫を基盤とし、子供自身が「5ラインズ」を活用して対話を振り返り、自己・相互評価を重視することで、対話への自覚が高まるということが明らかになった。それは対話能力の高い子供も、低い子供も同様であった。その理由としては、「5ラインズ」が教師及び子供間での共通言語となり、課題や新たな目標を共有する上で効果的に機能していたからであろうと推察される。また、継続して対話力を意識した活動を実践したことで、対話スキルへの理解が深まっていったといえる。対話スキルは、どのような状況で用いるとよいか、どんな効果があるか等について経験を通して個人的な方法知としての体験的な理解が重要であるからだ。もちろん、子供が個々に獲得した方法知は個人的なものだが、「5ラインズ」という共通した指標を用いて自己・相互評価を継続してきたことが、学級の対話の文化として根付いていったことが背景にあったことも大きな要因であろう。

一方、対話ノートを見返してみると、年間の活動の中には、記述が充実していたものと、そうでないものが散見された。今後の展望として、年間という長いスパンで、クラスの実態に合ったアクティビティをどのタイミングで、どの授業との融合をねらい実施していくか、更なる改善が必要である。同時に、どのように自己・相互評価をさせていくことがより効果的であるのか、再検討する余地があると考えられる。

### 参考文献

- 1) 北川雅浩 (令和4年12月) 「教師による対話アセスメントのための指標開発」. 熊本大学教育学部紀要 第71号
- 2) 中尾聡志 (令和6年 6月) 「学校現場と教育行政が協働して行う授業づくり」. 『月刊国語教育研究』626号
- 3) 北川雅浩・中里宏 (印刷中) 「自己・相互評価の支援を通じた児童の対話力向上への取組」. 熊本大学教育学部紀要 第73号